四つの季節の鉄道ものがたり

たーちゃん

朝吹真理子

十年ほど前まで、木曽川のそばのホテルによく泊まっていた。名古屋のデパートで、鰻やくちあたりのいいお菓子を買ったら、犬山まで、一時間ほど名鉄電車にのる。中学生のころ、墓参りのために家族で同じ路線に乗ったときは、太宰治を読んでいたことをみょうにおぼえている。電車の振動と物語のリズムが心地よくて降りるのが惜しかった。

犬山のそばの施設で祖母が暮らしていたため、母と二人で面会に行った。しだいにいろんなことを忘れていく祖母だったけれど、いつも食欲旺盛で、鰻重を、おやつがわりにぺろりと食べ、ババロワもゼリーも食べた。

祖母のことを私はたーちゃんと呼んでいた。言葉を覚えたてのころ、おばあちゃんと言えずたーちゃんと呼び、それが祖母の愛称になった。たーちゃんはいろんなことを忘れていて、私のこともあいまいだったけれど、一緒にゼリーを食べたり、郡上おどりの唄をいっしょにくちずさんだ。いつかみたいと思いながらもまだお祭りに行ったことがない。

いまは閉館してしまった、名鉄犬山ホテルという、のんびりしたホテルに私たちはよく泊まった。たーちゃんに会ったあと、部屋に帰ると、母は木曽川を眺めながら、ぼーっとお茶を飲む。私は着替えを持って、大浴場までの長い廊下を歩いた。脱衣場の蛍光灯は明るくてやたらまぶしかった。施設は古いけれど、いつも清潔なホテルで、大浴場は温泉だったらしいのだけれど、どういう効能があるのか、あれだけ入ったのに思い出せない。ぽんやりした湯だったが、かえってそれがよかった。大浴場の床は湿っていることがなくて、漂白されたタオルがピシッと積んであった。大浴場のそばにはマッサージ屋があり、いつもそこの誘惑にのるまい、と思いながらも結局抗えずに、予約を入れてしまう。

一度、脱衣場ですっぽんぽんになっていると、作家の顔を知っているという珍しい人がいて、朝吹さんですか？ときかれた。え、いまなぜ、と思ったものの、握手をすることになった。互いに、お辞儀をして、手を握りあう。その人は服を着ていた。握手の後、何事もなかったように、女性は、すーっと風呂場を出て行った。道すがら握手

イラスト・岡林玲

みんてつ

CONTENTS
Vol. 76
2021

◎日本民営鉄道協会とは？
1967年に社団法人として設立、2012年4月1日付で一般社団法人に移行、72社の民営鉄道会社で組織されています。
輸送力の増強と安全輸送の確保を促進し、鉄道事業の健全な発達を図り、もって国民経済の発展に寄与することを目的とした活動を行っております。
なお、JR各社や公営地下鉄などは加入しておりません。

四つの季節の鉄道ものがたり
02 たーちゃん
◉作家　朝吹真理子

04 特集／ニューノーマル・ウィズコロナの鉄道輸送とサービス
［新しい取り組みに果敢に着手する鉄道事業者の「いま」］

Progress Report
05 有料着席サービス列車の現状と展望

REPORT.I
08 サブスクリプションで定期券に新たな付加価値を創造する
―東急電鉄―
◉鉄道事業本部 運輸計画部 沿線マーケティング課 課長　梶谷俊夫
◉鉄道事業本部 運輸計画部 沿線マーケティング課　中村文香

REPORT.II
12 DX推進による効率化とサービス向上の相乗効果に取り組む
―東武鉄道―
◉鉄道事業本部 技術統括部 車両部 車両企画課長　今村憲司
◉経営企画本部 課長　金子 悟

REPORT.III
16 終電繰り上げによる夜間作業時間拡大で働き方改革を推進する
―東京メトロ―
◉鉄道本部 電気部 電気企画課 課長補佐　前薗 悟
◉鉄道本部 電気部 設備課長　宮田和雄

みんてつインフォメーション
20 「駅と電車のマナーアンケート調査」を実施中
「地方民鉄フォトコンテスト2021」
日本民営鉄道協会 新会長就任

Mintetsu Report
22 近畿日本鉄道 名阪特急「ひのとり」
くつろぎの空間を支える「ひのとり」の車両清掃整備

連載40 地方民鉄紀行
28 仙台空港鉄道株式会社

連載07 民営鉄道の起源を訪ねて―鉄路は何を目指したか
30 福島交通　飯坂線
◉日本宗教史研究家　渋谷申博

をすることになったのはそのときしかなく、素っ裸のときになぜ、といまだにおかしくなる。

大浴場は湯けむりが静かに流れていて、疲れも、湯気に紛れてゆく気がした。湯に浸かっていると、母が大浴場に入ってくる。母も私も大浴場ではしゃべらない。私はずっとひっついていたいくらいに母が好きなのだけれど、お風呂だけは別々の時間だった。体を洗うリズムも湯に浸かるリズムも違うので、どちらかが風呂からあがるときに、なんとなく顔をみあわせる。大浴場に浸かっていると、たーちゃんといっしょに家の小さなお風呂に入ったことを思い出す。祖母は乳房が大きく、のびたおもちのように垂れていて、乳房をめくって皮膚の裏側をごしごしナイロンタオルで洗う。汗疹ができるからよく洗うのだと言っていた。その仕草が面白くて笑うと、たーちゃんも笑い上戸だったので、二人で笑った。お風呂から上がると母も私も少しだけ元気になっていて、食堂で鮎を齧った。たーちゃん鰻ぺろりだったね、あのひとは昔から鰻が好きだから、ともう何回話したかわからない言葉を母と言い合った。この先鰻を食べられなくなるかもしれないしね、としみじみ母は言っていたが、祖母の強靭な食欲は死の直前まで健在で、おおいに長く生き、鰻をほうばりつづけた。

あさぶき　まりこ

作家。東京生まれ。2009年、「流跡」で作家デビュー。2010年、同作で第20回Bunkamuraドゥマゴ文学賞を受賞。2011年「きことわ」で第144回芥川賞を受賞した。2018年に小説『TIMERESS』を発表。エッセイ集に『抽斗のなかの海』、最新刊に『だいちょうことばめぐり』がある。